
一日遅れのバレンタイン×沖神

ゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一日遅れのバレンタイン×沖神

【Nコード】

N8382J

【作者名】

ゆき

【あらすじ】

2月15日、

沖田の想いに気付いた神楽は

一日遅れのバレンタインを沖田に渡す。

(前書き)

これは、銀魂を元にした物語です。
原作とはまったく関係ありません。
また、沖神が嫌いな方苦手な方はお引き取りください。

2月15日、江戸の町ではバレンタイン用の飾りが取り外されている。

昨日までバレンタインだの何だのはしゃいでいた町も、今日は静まり返っていた。

バレンタインが終わってからカップル率も段々上がっている。

「あーあ。暇アル！銀ちゃんなんかしてヨ！」

「何言ってるんだ。こっちはバレンタインチョコ処理してんだからな。」

「めえも手伝え！」

「いやネ。試食用のチョコなんて食べないアル！」

「・・・いや、とか言って食べてるよね。神楽ちゃん。それ食べるよね？！」

「静まれい！新八い！俺もう腹いっぱいだ。お前変わりに食べろ！」

「いや、だからしっかり食べっちゃってんじゃないですか！」

万事屋では、銀時が何回も往復して貰ってきた試食用チョコを食べるのに必死になっている。

食べても食べても減らないチョコは、銀時、神楽にとって幸せの波だった。

「銀ちゃん。どうやって同じチョコこんなに貰えたアルか？」

私でもせいぜい30個程度だったネ！」

「そんなん、数百パターンの顔持ってたら簡単なことだ！」

「どんな顔だよ！それ！やばいっすよ。ある意味！」

「銀ちゃんすごいネ！やっぱ、侍アル！」

「侍、関係ないから！」

そんな、万事屋に一人の客がやって来た。

「ピンポーン」

「あ？客？おい、新八出ろ！お客をまたせんなあ！」

「はいはい、分かりましたよ！……ったくこれだから、銀さんは」

「なんか言ったか？」

「言ってますん！」

「こんな時に客って誰やろか？」

きつと、バレンタイン何も貰えず悲しみに暮れた男ネ！きつとそうネ！」

「おいー。そりゃいくら何でも失礼だぞー！」

「そうアルネ！バレンタイン何も貰わずにいた男は何よりも可愛そうネ！」

銀ちゃんよりも！」

「なんだそれ！銀さんショックなんだけど……お？」

銀時の視線は玄関に移り、視線の先には思いもよらない男がいた。

「おい、神楽。バレンタイン誰にも貰えず悲しみに暮れた男が来たぞ。」

「おっ、まじでか？今行くアル。」

神楽は一目散に玄関に走ったが玄関につく頃には笑った顔がめんどくさそうな顔になっていた。

神楽はわざと、大きく舌打ちをする。

「おい。誰がバレンタイン誰も貰えず悲しみに暮れた男だ。チャイナ。」

「なんだ、お前か。用がないなら今すぐ帰りやがれ。カス。」
「用があるから来たんでイ。ちよつとは聞けや。」

そこには、沖田が立っていた。
一つの紙袋を持っていたが、たぶんそれはチヨコだろうと神楽にはすぐ分かった。

なんだ、こいつか。
よりもよってこいつか。
ムカつく奴が来たネ。

「銀ちゃんー。私、酢昆布買いに行って来るアルー。」
「おう。すぐ帰ってこいやあ」

神楽は一人、駄菓子屋に足を運んだ。
バレンタイン後の町を一人で歩くのは神楽くらいで、
ほかは、カップルだらけだ。

・・・なんだ。カップル率高えアルな。
私はそこの小娘じゃないアル。
バレンタインだからって騒がないネ。
あー。しかし、朝から嫌なもん見ちまったアル。
あんな奴バレンタインチヨコに埋もれて窒息するヨロシ。
しかも義理チヨコ。

そんなこと思いながら歩いてるとすぐ、駄菓子屋についた。

「おばちゃん。酢昆布ちょうだい！」
「はいよー。・・・あ、これおまけね。」
「チヨコ・・・アルか？」

「バレンタインの残りだけど持ってきた。」

おぼちゃんの手の上には、ハート柄の小包でくるのであるチョコだった。

まさに、バレンタインにもってこいのチョコだ。

「あ、ありがとアル。」

「それ、神楽ちゃんが食べちゃだめだよ。」

「なんでアルか？」

「好きな人に渡すもんだからな。」

「・・・でも私、渡す人いないネ。」

「じゃあ、義理でもいいじゃないか。」

「・・・うん。分かったアル」

「はいよ。またね。」

「またネ。」

おぼちゃんの持っていたチョコが神楽に渡された。
手に持ってみると、甘い香りが漂ってくる。

甘い香りがするアル。

ミルクチョコアルか？

まあ、いい。

それより、誰に渡そう？

万事屋の二人は、試食チョコで埋もれてるからなあ。
かと言って、ほかには渡す人もいないし・・・。

その時、一瞬神楽の頭に沖田が浮かんだ。

いや、それはないアル！

断じてないネ！

「おい、チャイナ女。探したぜイ。」
「?!・・・お前、なんで」

・・・最悪アル。

1日に2回もこいつの顔を見てしまったネ。
今日はついてないアルな・・・。

「何アルか? バレンタイン誰からも貰えず悲しみに暮れた男」

「・・・残念だねイ。俺ア意外にモテるんでイ。」

「だから何ネ? 自慢しに来たアルか? 自慢ならマヨラーかゴリに聞いてもらうネ!」

「違う。土方の名前出すんじゃないでア。」

「じゃあ、何アルか? 早く言うヨロシ!」

その時、沖田の視線が神楽の持っているチョコにいった。
一瞬、悲しそうな目をしたのを神楽は見逃さなかった。

「何アルか? なんで悲しそうな目するネ?」

「・・・てめえ。それ誰にあげるでさア。」

「誰でもいいだろうが。お前には関係ないネ。」

「そんなん知ってまさア。でも、からかいがいが、あるじゃねえかい?」

沖田は一瞬笑い、神楽を見た。

こいつ、私をはめようとしてるネ。
でも・・・その手には乗らないアル!

「フン。お前には死んでも教えないアル。」

「そうかい。俺ア。人の恋愛には興味はないぜイ。」
「なら、用はないアルネ。もう私は帰る。」

神楽は、来た道を真つすぐ歩いていった。
一瞬とも沖田を見ずに。

その姿を、沖田は瞬きもせずただずっと見ているだけだった。

「しゃらん」

その時、神楽のお団子の飾りが揺れて止まった。
沖田は、ビクともせず神楽の背中を見ているだけだった。

「ざあああ」

雨がふりだした。
雲行きは段々怪しくなる一方。

二人の間には長い沈黙が流れ、数分後、風になったかのように二人は雨に打たれながら
それぞれの方向へ歩いて行った。

何アルか、あいつ。
すごく悲しそうな目してたネ。
どうかしてるネ、あいつ。
けど・・・

「・・・まるで、私のチョコ欲しそうにしてたアル・・・。」

「ざあああああ」

「ざあああああ」

雨は次第に強くなっていった。

風も吹き始め、雷まで落ちてきた。

江戸の町は風でバケツが飛んだり

どこかの家は屋根が剥がれてる所もある。

店のシャッターはどこも閉め、町の中を歩いているのは神楽だけになった。

神楽は歩きながら、沖田が駄菓子屋で言ったことを思い出していた。

「てめえ、それ誰にあげるでさア」

「人の恋愛には興味ないゼイ」

そして最後に神楽の頭には沖田が追いかけて駄菓子屋に来たことが蘇った。

「おい、チャイナ女。探したゼイ。」

「そうか……。」

一瞬笑ってそう言った時からあいつは

私に何かを伝えるため必死だったアルか。

あいつは、有りつ丈の勇気を振り絞って来てくれたアル。

……結局、逃げてたのは私だけネ。

本当は気づいていたのに、気づいてないふりして逃げてたのは私だけネ……。

私はあいつ以下アル。

情けないネ……。

「おい。神楽あ。傘持ってきてやったぞー。有難く思えー。」

「……………」

「おい、神楽？どうした。」

「……。」

「なんかあったか？」

「……。」

「まあ、取りあえず帰るぞ。」

銀時は先を歩きだした。

神楽もそれについていく。

本当にこれでいいやろか？

このままで……。

――おい、チャイナ女。探したぜイ――

沖田のあの時の言葉が神楽の頭の中で繰り返される。

沖田のあの時の顔が神楽の頭の中に焼きつく。

沖田のあの時の目が……目を閉じるとリアルに映る。

あいつの、あの悲しそうな目。

このままで良い訳ないネ。

私がなんとかしないと駄目アル。

「銀ちゃん！！私、ちょっと行ってくるネ！すぐ帰るアル！！」

神楽は真選組の屯所の方へ雨の中走って行った。

あのままで、良い訳ないアル！！

このままでは、二人とも後味悪いネ！

絶対……絶対……。

銀時は走り去って行った神楽が見えなくなると、

優しく笑った。

「・・・頑張れよ、神楽・・・。」

そう言って、万事屋へ帰って行った。

神楽の走るスピードも段々遅くなっていく。

「はぁ・・・。はぁ・・・。くっ・・・。」

屯所が見える頃には、雨も風もピークまで達していた。

屯所の近くには、風のせいで散った木が何本も立っている。

その木はまるで神楽を応援してくれているようだった。

「・・・はぁ・・・。着いた・・・。」

神楽が疲れきっていると、真選組の副長が出てきた。

「・・・あ？チャイナ女じゃねえか？どうしたってんだ？雨の中」

「！・・・あいつは？あいつはどこアルか？！」

「あいつ？総悟か？総悟はまだ帰って来てねえ・・・あのさばり魔が。」

「・・・あいつは、どこ行った？」

「さあな。俺には知ったこっちゃねえよ。」

「そうアルか。分かったネ！」

そして、神楽はまた雨の中走り去って行った。

そんな神楽を土方は不思議そうに眺めていた。

土方が神楽が必死になっている理由を分かった時には、もう神楽はどこかへ行って来た。

「総悟。．．．よかったな」

「あれから数十分たったが、雨は一向もやまず神楽の体力も限界になってきた。」

くっそ。あいつどこ行ったアルか？

こんな雨の中。

思い当たる所は全部行ったネ。

もう、諦める．．．か？

「おい、チャイナ女。探したゼイ」

神楽の頭の中で、沖田の言葉がリピートする。

．．．あっ．．．駄菓子屋！駄菓子屋ネ！きっとそこアル！

神楽は最後の力を振り絞って、駄菓子屋に向かった。

雨の中を一人走る神楽は何を思っていたのだろうか？

それは、知る予知もない。

駄菓子屋には、予想通り沖田がいた。

やっと、見つけたアル。

「．．．チャイナ．．．？どうしたんでさア．．．？」

沖田はきよとんとしている。

神楽は少し笑った。

「おい、お前。探したアル。」

「・・・え？なんでさア。急に。」

神楽は駄菓子屋の時に持っていた、チョコを沖田に投げた。
チョコはもうどろどろだったが、
そんなことどうでもよかった。

「それ、お前にやるネ。」

「・・・これ。ほかの奴にやるんじゃないのかイ？」

神楽は、満面の笑みを浮かべるとこう言った。

「それは、元々お前のアル！！」

沖田は、一瞬不思議そうな顔になったが
次の瞬間には、神楽を抱きしめていた。
それに答えようと、神楽も抱き返す。

「・・・好きでさア。」

「そんなこと・・・とくに知ってるネ！」

「そうかい・・・。」

「・・・ごめんアルな。ずっと逃げてて。」

どうしても素直になれなくて言えなかったあの一言。

「・・・大好きアル。」

――ずっとふっていた雨もやみ、風もやんだ。

雲は晴れ、太陽が顔を出す。

江戸の町もたちまち明るくなった。

そして、すれ違って何度も傷ついた二つ恋心が
やっと重なり合って一つの花を咲かせる。

END

(後書き)

長い話最後まで読んでいただき有難うございます。

途中脱文もあり、もう訳が分からなくなった部分もありますが、私自身は満足な物語が書けたと思います。

この物語の感想や意見なども、どしどし待ってます(^^)ノ
本当に最後までお付き合いいただき、有難うございました。

(なお、この物語は原作とはまったく関係ありません。)

ゆき

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8382j/>

一日遅れのバレンタイン×沖神

2010年10月9日08時01分発行